

おおさか
KEY
ワード
第3回



©手塚プロダクション

大阪の偉人のドラマを
もつとえがいてくれないか
— 適塾と手塚治虫、司馬遼太郎 —

北浜のビジネス街にたたずむ国指定重要文化財の適塾。江戸時代の大坂らしい威風を残すこの建物は、種痘によって天然痘予防に尽力し、コレラの流行に対しても『虎狼痢治準』を著した蘭学者の緒方洪庵(1810~1863)の屋敷である。洪庵は適々斎塾(適塾)をこの居宅に開き、福澤諭吉、橋本左内、大村益次郎、大鳥圭介、長与専斎、佐野常民、高松凌雲など、幕末明治に活躍した偉才を育成した。現在、建物は大阪大学が管理して一般公開され、塾生の居室(一人畳一枚)や蘭和辞書が置かれた「ゾーフ部屋」に塾生たちの猛烈な勉強ぶりをしのぶことができる。

と、書けば堅苦しい話かなと思うかもしれないが、適塾は歴史学などの学術的世界だけではなく、漫画や小説、テレビ、映画など幅ひろいメディアにも登場するドラマの舞台となる“ドラマチックな名所”なのである。「鉄腕アトム」「ブラック・ジャック」などで知られる手塚治虫は、曾祖父の蘭方医・手塚良仙光亨(良庵)が適塾に学んだことから、彼を主人公にした漫画「陽だまりの樹」を『ビッグコミック』に連載(1981~1986年)したし、『竜馬がゆく』などで「国民的作家」とも呼ばれる司馬遼太郎は、大村益次郎を主人公とした『花神』(1969年)の舞台として適塾を描いている。最近では、若き日の洪庵を主人公とした築山桂の小説を原作として、NHK土曜時代劇で「浪花の華~緒方洪庵事件帳~」が放送されている。

奇縁と言うか、『花神』の冒頭で司馬は適塾を大阪大学の前身とし、洪庵を大阪大学の「校祖」とであると記しているが、司馬自身が学んだ旧制大阪

外国語学校は、後に大阪外国語大学となり、現在は大阪大学外国語学部となった。そういえば、手塚治虫も大阪帝国大学附属医学専門部に学び、曾祖父が学んだ適塾と自分の母校がそこで合流することになる。さらに築山桂も大阪大学の出身である。この流れを受け、大阪大学総合学術博物館では、緒方洪庵誕生200年記念・大阪大学創立80周年イベントとして展覧会「えがかれた適塾」を開催している(6月26日(土)まで。日曜休館、阪急石橋駅)。会期中は緒方洪庵没後100年記念に制作された映画「洪庵と1,000人の若ものたち」(木村莊十二監督)を上映している。

今年の龍馬ブーム再来と同様、動乱の時代に若者が活躍する幕末明治のドラマは、現代人の血も熱くするが、大阪の歴史を振り返ると、ほかにも小説やドラマ、漫画の題材となってよい時代や歴史上の人物は多い。この五月、真田幸村などを主人公とした「大坂の陣を大河ドラマにする会」が市民有志で結成されたというニュースもあった。また、元禄の新町遊廓を舞台とする漫画、もりもと崇の「難波鉦異本」が第8回手塚治虫文化賞新生賞を受賞しているが、井原西鶴や弟子の北条団水が登場する。

そこでいつも残念に思うのだが、決して派手な時代ではないにしても、大坂文化の爛熟した江戸時代後半を舞台に、博物学者であった“知”の巨人・木村兼葭堂や、「雨月物語」の上田秋成、町人の学問所・懷徳堂の中井竹山などが活躍する、深みがあって洒脱にあか抜けした小説やドラマ、漫画を誰かえがいてくれないものだろうか。